

後から来た二人の兵の自決の音ではないかと思いましたが、私も、もし後まで残っていたら同じように南国で骨を埋めたのだと思うと、涙が湧き出るように流れました。遠い他国で花と散った同期の戦友のことを思うと、その寂しさは筆や言葉では言い表しようありません。

それからまた、五百メートルほど離れた地点で、私は米軍のMPに捕らえられジープに乗せられました。走り出して着いた所が米軍の病院でした。私は耳も聞こえない、何も分からない。そのままの姿でその病院に入院させられました。それから二カ月間病院の治療で全治することができました。この喜びは言い表すことのできないものでした。

再度、「日本国捕虜収容所」へ戻りました。その時の通訳が花柳寿美様だと後で聞かされましたが、五十三年前にお世話になった方にお礼も申しておりません。その後、私も元気になり、キャンプ内では、私は進んで各島々への使役に船に乗って出かけ、島々の復興の使役を果たすことができました。この喜びを私は現

在も持ち続けております。

その後、復員船「氷川丸」に乗船、比島の港から約十四日間、バシー海峡を経て名古屋に無事上陸できました。三菱飛行機工場内でDDTで体を消毒され、復員証明書と二枚の衣類をもらって、兵庫伊丹の町へ無事帰りました。復員の日は、昭和二十一年十二月十三日でありました。

死闘の「鉄」

兵庫県 笹倉宏夫

私は昭和十五年徴集で徴兵検査で甲種合格でした。と同時に股肱の臣として青春の血が燃え溢れました。昭和十六年現役兵として姫路の部隊に入隊し、初歩教育と外地出征のために注射等を行い（三種混合）、二月二十日出陣で姫路駅頭へと歩武堂々と行進、乗車後は窓を閉じて外を見ることもできず、ただ君が代の曲が駅構内に流れていて、汽笛一声で発車しました。

宇品港で乗船し、朝鮮に向かったが、玄界灘は波が三角に盛り上がり、将来を暗示するかのごとく大荒れでした。朝鮮の羅津に上陸して汽車に乗ったが、長時間も北進し続けました。

周囲一面銀世界で、樹木の少ない小高い山、山が続き、ようやく三江省佳木斯ジャムスに着きました。二月二十七日でした。シベリアの寒風が雪を運んできます。雪は天から降ると思うのに、佳木スの雪は横殴りで、風上に向かっては目を開けられません。大変な所だな…心身を引き締めて覚悟して頑張ろうと心しました。今思えば初年兵教育の厳しさ、それに加えて私的制裁（拳）の中で私は真面目にこれを受け止め、軍人としての糧として精励しました。そのような日々の積み重ねが軍人精神、大和魂を私自身に育ませました…。

この無茶苦茶なような教育訓練が、その後役立って、かのフィリピンの激戦によく耐え、最後には疲労困憊して一步も前進できない極限状態でもよく耐えることができました。これこそ名実共に現役最古参兵として関東軍で鍛錬した賜と感謝しています。

我ら昭和十六年兵がこの大東亜戦争の中枢として命を国に捧げ、存分に活躍できたことに悔いは残していません。満州の四季は長い長い冬、短い春、短い夏、そして短い秋と過ぎ、また長い雪の大地と化します。一面の銀世界もまた壮観、一面の雪もその日によって、表情が異なり、明るい雪、暗い雪、嬉しいような雪、悲しいような雪などなど、様々な自然現象も見る人の心で差異があると思いました。

大地は鋼のごとく硬く、松花江（スンガリー）も厚い氷が張り自動車をはじめ何でも通れる重要な交通路で重宝されるが、水が少し温むと「ドーン、ドーン、ドドン」と大音響と共に割れて流れる。その様は実に壮観です。四月には路傍の淡雪の下から迎春花が春を呼び、五月にはたんぽぽが咲き乱れて胞子が乱舞し、六、七月ともなれば一面の原野に夏草が生い茂る。大陸の暑さは格別でした。現地の開拓団や農民は秋の穫り入れに大わらわの収穫期が目の前でした（高粱、粟、いも、大豆）。肥沃な大地の賜です。

私たちが初年兵の教育訓練も日増しに厳しくなりまし

た。教官は陸軍士官学校出身のH少尉、助教はK軍曹、助手はH兵長とT上等兵と飛び切り優秀な方々でした。

精神と教練と、世にいう心技体が充実に初めて一人前の軍人だ、を目標にして全員一生懸命（一人の落伍もなく）勉強しました。

徒歩教練は軍人の基本で、歩くことであり、広々とした佳南練兵場を完全軍装での長距離行軍、また匍匐訓練も大変です。膝と肘の皮膚が破れたり赤く腫れ上がったものです。また鞍馬隊ですから乗馬訓練があります。馬という動物はかわいがってやるとよく馴れて、自分の心に慕ってきます。愛情はどのような動物でも皆同じだと実感しました。当初は鞍無ししの裸馬にて速足、三八式騎兵銃を背負い、銃がこすれて銃傷が背中にできて血がにじみ、尻の皮がむけて出血し、痛さのために歩行に難渋しました。飛び乗り飛び下り、障害飛び越しなど初年兵第一期間の貴重な訓練を行いました。

そして一期の検閲実施中のことです。ソ連軍の大移動を察知して動員令が発表され、「スハ一大事」と緊

張が走りました。内状はドイツ軍進攻のためにソ連の極東軍が西部ロシアに動員されたとのことでした。このとき、内地でも第五、第六との大動員があったらしく、間もなく我隊にも兵員と軍馬が続々と到着しました。その中に故郷の懐かしい顔がありました。T車医、A君、O君、そしてS君（衛生兵）らである。

時の外交折衝で松岡外務大臣が日ソ不可侵条約を締結したとか、一応風雲急の緊張がどこかに：平静を取り戻しました。この時点で関東軍百万の軍隊だったか。兵舎も甲編成で赤煉瓦の二階建てで立派でしたが、兵員増加のために各班に中二階を増設し、兵営も朝日兵営一つでは手狭なために約千メートルほど離れた所に敷島兵営を増設しました。新兵舎は半地下式で夏は涼しく、冬は暖かく現地においては格好の兵舎でした。

敷島兵営は満州第一二四部隊第一大隊本部と第二、第三中隊の起居屯営でした。朝日兵営には連隊本部、第一中隊、第二大隊（自動車）本部、第四、第五、第六中隊その他施設等が駐屯しました。私も勤務演習に勉強の日々が続きました。関東軍特殊演習（関特演）

をはじめ師団合同、連隊等の大演習、大訓練を積み重ね、特に冬期作戦は零下四〇度余（耐寒温度六〇度）の厳寒の輸送任務や、水上、雪原演習は、将兵、軍共に疲労の極に達しました。また雪解けの湿地通過訓練は身を切るような水中に胸まで入っての車両通過も厳しく、夏季は三〇度余の猛暑炎熱の中、昼夜転倒訓練と、名実共に関東軍精鋭部隊を形成しました。

昭和十八年春、現役（十四年徴集）、古参兵（野戦下番）の方々が逐次満期除隊され、私たち最古参となりました。このころに現役兵の満期は無期延期となりました。いよいよ故郷を遠く感じました。

昭和十九年三月、北満の北東隅の同江、富錦地区（ソ連ハバロフスク対岸）に一大築城をすべく、車、師団を挙げての作戦に参加出動しました。急峻なウリゴリ山への輸送、夜は狼の出没を警戒し、山中の生活の不自由と暑さに耐えて汗まみれでした。

時は昭和十九年七月二十八日、第十師団動員下令、即、原隊復帰で全軍佳木斯に引き揚げました。出動準備

は平常訓練を見事発揮して行動の迅速なことは申すまでもありません。戦時出陣編制で、私は現役下士官として中隊本部指揮班に属しました。

ちなみに中隊の出陣時の編制を申しますと、通称号鉄五五四部隊、第一大隊（輓馬隊）三個中隊で、各中隊の編制は左のようでした。

中隊長以下指揮班九名・作業分隊長以下二十一名
歩兵第一小隊・長以下二個分隊六十三名

輓馬隊第一小隊・長以下二個分隊八十三名
中隊総人員二五九名

右の編制にて堂々と永年住みなれし兵営を後にしました。残留要員二十名に見送られ佳木斯駅にて乗車、朝鮮釜山港にて乗船しました。船上二週間を経て八月二十八日台湾基隆港に入港しました。台湾全島を鉄兵団が守備のために各部隊それぞれ要衝に配置分駐しました。

師団司令部は台中に、我が部隊は彰化に、そして各中隊、小隊と分駐しました。比較的のんびりと送日しながらも対米戦闘を企画して重点的訓練を行いました。

十月十二日、米軍機動部隊接近の報と同時に空襲警報発令で台湾沖海空戦に遭遇しました。彼我不明なるも空中戦で飛行機が火を吹いて墜落するのを眺めていました。

十二月一日「捷号作命甲」が発令され、鉄兵団は比島戦線に出撃し第十四方面軍の指揮下に入りました。全軍高雄に集結乗船しました。出発は「有馬山丸」、輸送指揮官歩三九連隊長の永吉実展大佐。師団主力は「江の島丸」、輸送指揮官歩十の岡山誠夫大佐。「大威丸」歩六三連隊長林霞一大佐。「乾瑞丸」は我が部隊長鍋島英比古大佐と、四隻の御用船に各兵科分散して乗船しました。万二不測の事態が発生した場合を考慮しての兵科分散の行動です。なお、鉄兵団長は司令部要員を帯同して、マニラに先行（空路）し、第十四方面軍司令官の隷下に入りました。

「有馬山丸」は十二月五日出向し、十一日マニラに入港、上陸活動しました。主力船三隻は十二月十三日出港して、「江の島丸」はルソン最北端アパリ東カサブランカに上陸、一路南進してサンホセに向かって進

軍し合流、予定より私たちは一足早くサンホセに着き、昭和二十年の正月を餅の配給を受けて新春を祝しました。

「大威丸」は無事に全員上陸し、サンホセに向かって進軍中とか。「乾瑞丸」は北サンフェルナンド港を目の前にして敵潜水艦の攻撃で沈没し、千二百名の生命を海の藻屑としました。我ら鉄五四五四部隊主力が大打撃を受けました。勿論、武器、弾薬、糧秣など一切がリンガエンの海深くに沈みました。「有馬山丸」の先発隊もそれぞれに任地に向かって行軍し、陣地構築中とか。

時に第十四方面軍山下司令官は米軍の日本本土への攻撃を一日でも遅らせるために尚武集団はルソン島における一大持久戦を指示し、南方軍最後の興亡戦とした我が鉄兵団はサンホセ付近に集結し、ルソン島中部のカラバリョ山系パレテの一大峠にて敵対迎撃の布陣を命じました。我が部隊は全力を挙げて各前線陣地に對して弾薬、糧秣の搬送、わずかな休憩もなく、不眠不休の二十四時間態勢といった実に厳しい戦闘一色、

死物狂いの活躍でした。センホセを出発した我が隊も陣地に着くべくバレテ峠に向かいました。異国の風景も目新しく、南方特有のいろいろな植物、特異な簡易な家屋、その生活様式も大変に違うようです。祖国を遠く離れて改めて決意を一層固くし、行軍に際してもこの土地を強く踏みしめました。

どんどん進軍していく中で、ある小部落に差しかかりました。村に沿って大きな川に橋があり、その橋の手前まで来たとき、土地の子供（小学校くらいかな？）が五、六人並んでいました。私は中隊指揮班の先頭を歩いていました。ところがその子供たちが突然お辞儀をするので「偉いなあー」と思っていたら、今度は皆が大きな声で、

「見よ東海の空明けて、旭日高く輝けば……」

と上手に歌うではありませんか。私はびっくりりして頭の毛が逆立ちました。思えば去るバターン作戦で日本軍が圧勝して、敵将マッカーサー元帥が「また来る三年」の名言を残して立ち去りました（アイ シャル リターン）。それから三年の間に日本の小学校も出来

て、教育に宣撫に素早くこんな所まで教育が進んでいたのかとほんとに驚き目を丸くしました。

急峻な峠道を登り（バレテ峠）、曲がりくねった斜面を下り、麓の町が「サンタフェ」です。峠に向かって一番大きな谷間を大和谷と呼び、それより流れ出る川を大和川と呼称しました。

この谷を我が隊の基地とし、連隊本部、第一中隊、第二中隊と配備し、第三中隊は五号国道を北上したボネ・アリタオの対岸で南に大きな山の麓にあるマンガヤン部落という小さな谷間に設営しました。その右手に山麓に沿って第二大隊本部、第四中隊、第五中隊、第六中隊、連隊本部（後方基地）。なお四月ごろには、それより西側に撃兵団の輜重戦車数両が駐留しました。ドバックスへの道路端に「マンゴー」の大木があり、傘をさしたような実に見事な大樹でした。根元に弾薬や糧秣を集積するのに格好の所で敵機の低空飛行も発見されぬ。後の山の突出した所に対空監視所を設けました。アリタオ平野からボネ方向、北に向かつてはバンバン方面までが一望できる最良の陣地でした。

一方、リングエン湾付近の「水際戦術」も我に利あらず、勇敢な人間魚雷もあったのですが、敵機動部隊は早くも察知してか多数の艦船をもって包囲し、砲撃、爆撃と上陸用舟艇にて素早く上陸を敢行しました。その電撃作戦は敵ながら見事でした。そして休む間もなく、一月十三日には鉄兵団の正面に迫って戦闘が開始され、いよいよ正念場。我が中隊も日夜を問わずパンパンの貨物廠、アリタオの兵站・ボネ街道を経てサンタフェの弾薬・糧秣交付所まで毎日毎日通いました。

その間、だんだんと戦闘は惨烈を極め、米軍は物量に物をいわせて早くも制空権を取り、我が物頭に飛行機が谷間に沿って超低空飛行し、ベル、双胴のロッキード、グラマンと木の葉がゆれ動くほどの猛爆音で、日が立つにつれ、ついには昼夜を問わず爆音を聞くようになりました。

四月ころにはコンソリデेटトB24、ボイーングB29に次いで大型爆撃機がバレテ峠を中心に縦横の大爆撃を行い、さしものジャングルも草木もイゴロツト族の芋畑もひっくり返しました。大木も中途から折れ、

山肌が剥き出して惨烈を極めました。

各部隊陣地も悪疫と熱射病・マラリアが発生と砲撃・爆撃で玉砕に近い状態に追い込まれましたが、「死闘の鉄兵団」と後に名を残すだけに、辛抱強く死守と言う名のもと命惜しまず懸命に戦いました。我らの主任務である輸送も状況悪化のために昼間行動が不能で、夜間のみになりました。それもゲリラ、米比軍の出没を警戒しながら万全の努力を払い黙々と……。しかしながら夜は夜で、昼間観測機で砲弾の弾着を計り正確な砲撃目標を作り、五分か十分と間隙をおいての定点砲撃に悩まされました。ついにはサンタフェの糧秣、弾薬の交付所（兵站末端地）から各前線陣地までの搬送も臂力搬送で、山へ登り沢を下り谷を渡り、また山を登り、夜陰に紛れ、朝霧の晴れるまで輜重兵魂を貫徹し、それは筆舌に絶する働きでした。

バレテ峠の西バギオの間点のサラクサス峠には戦車第二師団の撃兵団が守備していました。鉄兵団からも搜索第十連隊（騎兵隊）、歩兵第三十九連隊が配備

し、両隊とも数名が生存しただけで玉砕でした。その峠の後方基地イムガンにも何度か輸送を行いました。その時に故郷のお寺の住職I中尉と隣町出身のY君に会いましたが、その後二人とも名誉の戦死をし、比島の山中に骨を埋めました。また、我が隊から転属されたM准尉は迫撃砲の破片で片目と鼻を飛ばされ重傷で帰国されました。

夜が明けると直ぐ、敵の観測機（アブ・凧）が飛来しました。低音でブーンと軽い音で飛び、優秀なカメラと聴音器を備えており、谷間で飯盒を洗う音が聞き取れるとか。それを砲兵陣地に知らせ即砲撃をします。正確無比で命中率百パーセントです。夜間山上に立って見ていたところ、敵陣後方でパッパッと発射光があり、瞬時にして頭上をリユリユと弾道音がして、一呼吸したときに後方拠点にパッパッと火花が上がリ、ちよつとしてから爆発音を耳にしました。光と音の差異を戦場にて、しかも敵の砲弾にて実験したわけです。

また忙中閑有りと申しますが異様な情景を話します。

この地方の家にはバナナ・ポンカン・ミカンなどの木が植えてあり、植物の花咲くころは良い香りがします。虫類も日本と異なり年中生存しています。中でも螢は花の甘い香りを求めてか、一本の木に幾千万と群れ集まり、どんな立派なクリスマスツリーも遠く及ばぬ美しさでした。

私に命令がありました。任務はバレット峠の西側榛名山の野砲隊第五十一部隊へ馬と車両を受領せよでした。各分隊から兵員二十名を出してもらい、昼間は国道や一般道路は通行できませんので、川岸や山沿いの小道を通って山中に分け入ります。裏山の頂上に出て山の稜線上を歩き、時には走り、迫撃砲弾が飛び交い、頭上の樹木に当たって炸裂し、硝煙の生臭い中を走り抜け、夜になると有線の電話線だけを目印にして無言で進みました。

この辺は敵の爆弾・砲弾にて攻撃され、硝煙の臭いが強く辺り一面に立ち込めています。その中に兵隊が倒れている姿を見ますが、片手拝みで通過しました。実に血生臭い戦場です。ちよつとの油断もできぬ、電

話線もなく、頭の中の地図では登ったり下りたりして大分歩いて来ました。パレテ峠頂上らしき地点にて電子頭脳を働かせて思索しました。

前の山が榛名山だ。さすれば野砲隊はこの前の谷側にいるはずだ。分隊を稜線上に止めて、自分は二名の兵を連れて進み、右側か左側かと迷いましたが、右側の山中を選んで静かに下りました。大分下りて、……人の気配がしました。息を殺して耳を立てた。さっと殺気がみなぎる。少し辛抱していました。すると小便の音がする、人間だ。次に友軍か米軍か不明です。私は稜線を登ったり下りたりして来たから、現在位置が分かったようで本当は何も分かかっていないかもしれない。しかし私は咄嗟に「待てよ、この人間は小便が終わったら、壕か幕舎に帰ると何か言葉を出す。それまで待って」と思い、二人の兵を静止させて自分のみ少し四つん這いになって進みました。「コッソ」と手に当たった。鉄だ。さわって見たら友軍の鉄兜だ、「シメタ」と思ったがまだ喜べない。先の男が英語を喋るやも分からぬ。すると小さな声が聞こえた。まさし

く日本語だ。さあこれで一安心、もう夜明けも近い。残した兵を静かに呼び寄せました。

だんだん夜が明けるにつれて、辺り一帯が人の気配に満ちていました。私は責任上ホッとしました。この部隊は鳥取の第六十三連隊だ。ここは大きな谷間で、来る途中で大きな峰を幾つも越して来たが、こんな大きな谷間（金剛山の谷）があることは知らなかったのです。前後左右の山や峰に大きく生い茂った大木が、皆半分ぐらいのところから折れて白皮が出ている。砲爆撃の激しさを物語っていました。

第一線の最前線で朝食をどうしようかと思索してたら「飯が少しあるぞ」と言われて頂戴し、各人で少しずつ分けて食べました。「現在地十六時集合」で各人解散させました。初年兵で同期であった第一中隊のK君、第二中隊のA君と二人は、満州佳木斯を出発直前に興山鎮の第六十三連隊に転属していました。このような戦場で再会する因縁に驚き少しの間語り合いました。昼間行動はできず、ゆっくりと壕の中で休ませてもらいました。両君とは互いの武運を祈って別れまし

た。この部隊の死守した金剛山も玉砕しました。

夕方になって我々は出発しました。バレット頂上を越えて向う側の坂道を少し下りました。野砲隊(榛名山)到着。早くも暗くなり沈黙行動を要求されました。無論、マッチ、煙草は駄目、前方の山上から米軍が絶えず観測しているとのことで現況は非常に緊迫していました。馬と車両を受け取り出発しました。夜は国道五号線も大丈夫で、峠の下り坂を走って麓のサンタフェまで来ました。その前に定点砲撃があるのでその場所では充分注意して行進しました。勿論ゲリラも要注意でした。

突如として爆音が聞こえ、超低空で偵察機がビュンと身を切るように飛来し、バレット峠の山に沿って急上昇、一瞬の出来事だっただけに隠れることもできず「しまった」と思いましたが、飛行機が低空すぎて我々がよく見えなかったと解釈しました。もし引き返して機銃掃射されたら一巻の終わりでした。まあ無事に帰隊できて任務を完了しました。

連隊本部の伝令で同年兵の三木市出身のF君が来ま

した。急に発熱し、風邪をひいたのかマラリアか、すぐ帰れなくなり、私の所で休養し元氣回復して、凶らずも連隊本部から来た連絡将校に同道して帰隊しました。同年兵のこととて「元氣でやれよ」と別れました。その直後、悪い便りが届きました。アリタオの町で川を渡ったときに敵の直撃弾を受けて「アッ」の声もなく五体は飛び散ったとのこと、何という運命だったのか。

戦闘もたけなわになりました。私は日直下士官として雑多な業務に忙殺していました。緊急命令で、サンタフェの連隊本部に連絡に行くことになり、兵一名帯同するのにだれもいない。見ると故郷が同じO君がいたから「今から本部へ連絡に行くから同行してくれ」といい、彼は即座に了承してくれて、夕暮れの明かりのあるうちにと、軽装にて駆け足で出発しました。途中ボネの辺りにてゲリラに遭遇しました。O君は「死なば一緒です」と応戦すべく身構えたが、敵の数が不明です。ひとまず体を道端の溝に遮蔽し、状況判断して川の方に走って国道沿いに川岸を体を低くして前進

しました。武器は自分が拳銃と手榴弾二発、○君は小銃と弾丸三〇発です。真っ暗闇の中を進み、無事任務が終了したこともありました。

わずかな軍馬も斃れ、自動車も燃料不足で困難を極め、最後には全員が臂力搬送あるのみとし、その重責を全うしました。

時に鉄兵団長は、我が部隊に第一線出動を命じました。自動車輸送の花形として活躍した強者の第二大隊が出動です。いよいよ最後だ、大和魂の発揮の時だ、自動車男の花道だ、と颯爽として、米軍攻撃目標の真っ正面の妙高山陣地に向かって出陣しました。しかし戦況ますます我に利あらず制空権は敵の手に、地上は重火器に戦車を加えて、我が前線陣地に迫りきて、一日と我が陣地は失墜しました。バレット峠前面に肉迫し妙高山陣地に布陣した我が部隊も時既に遅く、着陣早々より強力なる米軍機動部隊と戦火を交え、第一日より多大な犠牲者が続出し、以来、繰り返し繰り返しの空爆と長距離砲撃・重戦車を先頭にし、火炎放射機等を駆使した反復攻撃となりました。

これらによく耐えて戦い抜き、最後には撃つ弾なく、雄叫びも砲声に消え、飲まず食わずで最後の一兵になるまで頑張るといった心意気。妙高山陣地も大打撃で、四月上旬第五中隊と第六中隊よりの選り抜きの重機関銃小隊が全滅。四月中旬には第四中隊全滅。四月下旬には第六中隊応援隊も数日にして全滅といった悲壮な状況となりました。この間、四月十九日第二大隊長戦死、二十三日大隊本部陣地では七、八名しか残存せず、夜陰に紛れて全生存者結集し、明日からの戦闘に備える状況となりました。

敵は戦車M4型を先頭にして徒歩部隊が攻撃をゆるめないが、我が陣は最早小銃のみでの応戦するしかすべなく、全員死を覚悟で撃ちまくる。敵徒歩兵は戦車に随行できず、戦車も何回となく後退し、また改めて攻撃をしてくる。米軍は急峻な山岳、馬の背のような地形も、タンクドージャー（戦車の前にブルドーザーの爪や鋤を付ける）で道を造って前進してきました。

バギオ地区は敗退し、サラクサス峠も敵の手に落ち、ひとり鉄兵団のみが最後まで頑張ったバレットの嶮も突

破され、プニカン・ミヌリ・鈴ヶ峠と東西南北と広範囲にわたり最強軍団の最強陣地も怒涛のごとき敵軍に蹂躪されました。配属・増援部隊も壊滅しました。ポネ陣地には、かの学徒出陣の勇者が戦車撃滅隊として布陣していますが、あたらこれらの有意の青年も散華することだろう。

六月初旬、米軍は雪崩のごとく峠を越し、夜間真っ暗だった峠道（五号国道）を煌々と自動車のライトで照らしながら走り、また峠の頂上は発電機で明々と輝かせていました。その情景を見るだけで涙をのんだものです。

マンカヤン陣地も最後の日がきました。最後の決戦だ。「アリタオ川で決戦だ」全員死守せよ、弾薬を持てるだけ持ち余分は処置し、軍服も良い物を身に着け、古着は一切横穴の壕に放り込み火を付けました。全員死に花を咲かそうと準備完了、出発、と…命令が急変し「部隊は次期作戦準備のためカミブ盆地に集結し、ピナバガンを経てカガヤン平野に出るべし」でした。

作命の変更で一時に気抜けがしました。対岸のアリ

タオに砲声が轟いています。夜にまぎれて堂々と転進です。ドバックスを過ぎてピノンの峠に向かう。六月中旬カシブに到着、糧秣の収集に明け暮れ、転進命令で次地点ピナバガンに向かう。海拔千数百メートルの山岳地帯にて兵団全員が遭難し、飲料が途絶してさながら生地獄でした。八月初めによく目的地ピナバガンに着きました。まるで敗残兵のごとです。

次作戦に備えて武器の手入れ、食糧の確保と病める戦友は一日も早く健康回復にと全員力を合わせて働きました。八月二十日ごろ終戦を知らされました。八月二十九日、尚武集団長山下奉文大将の「作命甲第二〇〇三号」で「総ての作戦任務を解除される……」全員に布告。数刻の間ただ一人として……寂しとして声無し、でした。

数日経過した時点で無条件降伏の発表あり。我が耳を疑い愕然としました。九月十九日ヨネスで武装解除が行われ、二十三日エチアゲ飛行場で軍装を解いて軍服から肌着まで全部脱いで丸裸になり、背中と尻にP Wとペンキで書いてあった米軍支給の作業複を着用し

ました。爾来二年数カ月間屈辱の抑留生活を送らされました。想い出しても不愉快でした。

復員は昭和二十一年十月です。

されど我が人生において二度と体験できぬ年月を過ぎたこと、今しみじみと感じています。請い願わくば散華なさいました英霊各位の安らかに眠りあらん事を心より念じています。最後に平和の尊さ、有り難さを、かみしめて今日このごろです。

フィリピン・イポ山地

独立機関銃第十三大隊の最期

福岡県 丸山市 松

私は大正十二年四月十四日、筑豊の炭鉱町の生まれで、炭鉱の街を転々として、田川郡勾金村下高野（現在香春町下高野）に住み着いたのは、小学校二年生の時でした。父親は炭鉱気質で、お金の有るときは益か正月かといった生活でしたが、家の生活は毎日苦しい

ものでありました。小学生の私は母親を助けたいという一心で仕事場を探し、田川の宮尾炭鉱で炭車の油差しの仕事をしたりしたので、母親の生計の助けになったと思います。小学校四年生半ばまで通学しましたが、学校にも行けなくなりました。家族は両親兄弟妹六人暮らして家が貧しかったから苦労しました。

学校には行けなかったが、その当時、青年学校という制度があり毎週一日だけ通いました。昭和十五年数え年十八歳の時でした。青年学校三年生の私たちに先生が「お国のために、天皇陛下のために命を捧げる者はいないか」と言われ、軍隊に行く決心ができました。軍隊志願のことを父親に話したら、「それは駄目だ」と反対されました。父親の承諾がなければ志願できない。しかし、私は決心ができておりましたので、父親のいない日に印鑑を持ち出し、村役場に行き現役志願の届を出しました。役場の兵事係は何も言わず受け付けてくれましたので、同年、田川郡伊田町（現田川市）の小学校の講堂で身体検査を受け甲種で合格しました。

昭和十五年十二月八日、十八歳で、朝鮮平壤の第二